

地域社会におけるリーダー育成の事例報告

○阿部 信博

岩田 惇 朝倉 徳雄 小川 貫 黒木 求

(日本大学理工学部)

スポ健大学 育成の成果

1. 目的

今日、「ふるさと創成」「村おこし」「地域の活性化」「生涯学習」等々、自治体は健全な地域社会の発展を願い、様々なイベントを催すなど力を入れている。

このような願いの担い手としてのリーダーの育成、つまり、グループや組織作り、健康教育や生涯教育を普及・育成できる人材を育てることを目的とした、「スポーツ健康大学」の実際を体験し、その成果を検証して自治体に資すべく報告するものである。

2. 方法

発表者が千葉県船橋市が開校する「船橋市スポーツ健康大学」に体験入学してその内容を把握する。

スポーツ健康大学の卒業生 307名（1期～6期）に対して、質問紙によるアンケート調査を行い、学んだことに対する評価や意識の変化、現在の活動などを検証する。

3. 結果

(1) 船橋市スポーツ健康大学の概要

この「船橋市スポーツ健康大学」は、スポーツ健康都市宣言をした船橋市が、その活動の一環として1986年以来実施し、現在第8期生が学んでいる。この大学の学長は船橋市長であり、実際の活動を担当するのは船橋市の社会体育課となっている。

この「大学」の設置された目的は前述の通りであるが、学習のテーマは(1)式典(2)チーム作り(3)現状把握(4)スポーツ実習(5)TKJ法(6)イベント実習(7)開発(8)街作り研究(9)スポーツ医学(10)スポーツ指導(11)卒業研究(12)総括などとなっており、合計60単位が設置されている。

講義形式、グループ学習、ディスカッション方式の授業は、毎週1回木曜日の午後7時から9時までの2時間行われているが、日曜日1日ばかりで行われるスポーツ実習やイベント実習には最低2回は参加しなければならなくなっている。また、イベント実習や卒業研究の打ち合わせでは、グループ毎にかなりの時間を費やしているようである。さらに、単位外に(1)各種イベント(2)自主講座(3)公開講座などへ合計5回程度の参加が義務つけられており、全課程終了を1年間として企画されている。

学生の定員は60名であるが、1991年度の第6期までの修了者は311名であり、その年齢は19才から58才と幅広いが、40才前半の受講者が多く、どの年度も受講者の平均年齢は40才代となっている。

学習の援助者として船橋市総合教育センター所属の講師と大学助教授を専任の講師として置くほか、学習の内容に合わせて、生理学、心理学関係の大学教授や助手、あるいは自治連合会、体育指導員、青少年指導員などリーダーとして活躍している人々を臨時講師として招き、さらに「スポーツ健康大学」のOB数名を協力指導員として常時採用するなどバラエティに富んだスタッフを準備している。

(2) アンケート調査結果と考察

調査対象者 307名中 (男 156名 女 151名) 回収できたのは、男子71名 (46%) 女子62名 (42%) の合計 133名 (44%) であった。

スポーツ健康大学のカリキュラムのなかで「役立っている」と高く評価したのは「イベント実習」の62%であり、「チーム作り」56%、「スポーツ実習」55%などとなっている。「街作り」(19%)、「開発」(25%)などの評価は低かった。これは、イベント実習には多くの時間を費やして取り組んだこと、スポーツ実習は楽しめること、一方「スポーツ健康大学」に学ぶことで街作りに取り組むのは容易ではないこと、エリックバーンの提唱する「交流分析」を通しての「開発」の授業が未消化であり、そう簡単に自己開発につながるとは認識できなかったことなどが考えられる。また、「スポーツ指導」に対する評価が42%とあまり高くなく、「大学名と内容が矛盾している」「スポーツを目的に入学したのにやるきを無くした」などの意見、体育指導員の受講生がかなり多いことなどを考えると、改善すべきであろう。さらに、男女の比較ではどの授業に対しても女性の評価が低く、回収率も低かった。

コミュニティリーダーとしての意識では、入学時には「強くあった」「かなりあった」「少しあった」を含めると64%あり、卒業時には74%に上昇している。しかし、調査時には65%に下降し、女性にはこの傾向がより見られる。

スポーツ健康大学や地域活動を介しての仲間の増加、新たなスポーツの経験、地域の現状を知る等々については明らかな効果が見られた。

スポーツ健康大学卒業後の活動においては、各種イベントやコミュニティ活動にスタッフとして参加することが「大いに多くなった」「少し多くなった」とする者が合わせて74%おり、卒業後の地域活動が顕著であることが伺える。実際に1992年に行われた主なイベントへの参加人数調べでは、ジョイ&スポーツに64名、グランドゴルフ大会に74名、スポーツの祭典に40名が企画・運営・協力スタッフ等で参加し、老人大学運動会(36名)や成人駅伝(31名)等に行政や主催側の要請に協力スタッフとして参加している。

(この資料はアンケート調査では人数を把握できなかったため、別途調査による)さらに、各コミュニティやグループで、ばか面おどり、ダンス、テニス、卓球、運動会等々数多く催していることが伺えた。

「何が地域活動の意欲になっているか」との質問に対しては、仲間作り、出会い、ふれあい、友達、楽しいから、楽しむ、といった答えが多く、健康、スポーツ好き、学習自己啓発、などが続いている。地域の活性化、スポーツの振興、親切、社会へのお礼、コミュニティ作り、といった者は少なく、人とのふれあいや自ら楽しむことを大切にしたい、どちらかと言えば自己に重きをおいた地域活動を望んでいると思われる。

4. まとめ

大学の目的を入学希望者に正確に伝えることやカリキュラムの一部に改善が望まれるが市が卒業生をイベントの企画・運営に活用できる体制が整いつつあり、自治連合会や体育指導員、青少年指導員等にならぶ活動を行い、独自の活動も盛んになりつつあってそれなりの成果を挙げていると思われる。ただ、アンケート調査の回収率が44%であり、そのなかで論じているのであって、どの程度の歩留まりでよしとするかは判断できない。(アンケート調査は1992年12月 郵送で行ったものである)